

# 大学生の時間的展望と内定獲得

法政大学キャリアデザイン学部教授 田澤 実

法政大学キャリアデザイン学部教授 梅崎 修

## 1 問題と目的

就職活動では、学生生活で最も力を入れたことをエントリーシートに書くことがある。また、自分の将来ビジョンを面接で尋ねられることもある。これらを行う際には、現在から過去を振り返ったり、未来に思いをはせたりすることがある。これに近い心理学の概念が時間的展望である。

時間的展望を定義した研究のひとつに Lewin (1951) がある。この研究は猪股佐登留によって翻訳がされている。この訳語を適宜改変した白井 (2018) によれば、時間的展望の定義は「ある時点に存在する個人の心理的過去および心理的未来についての見解の総体」である。Lewin (1951) によれば、個人は現在の事態のみを見るものではなく、その未来に対する期待、願望、恐怖などをもっており、かつ、自身の過去の見解などの影響を受ける。

進路選択に関連した大学生の時間的展望の先行研究では進路意識や進路選択行動を扱ってきた。たとえば、富安(1997)は未来指向的で、未来イメージが明るく、過去・現在・未来を統合的に捉えているほど進路決定自己効力が高いことを示した。田澤・梅崎 (2019) は、就職活動開始時期においてキャリア意識が高い学生はキャリア意識が低い学生と比較して、過去に大切だったと思えるような人と会い、努力をし、経験として残っている者が多いことを示した。都筑 (1999) は、大学3年生を対象にした調査で、一般企業の就職活動に

関連する情報収集の開始群は未開始群よりも、時間管理と計画性に優れていること、大学4年生を対象にした調査で、進路が決定している者は未決定の者よりも時間管理が優れていることを明らかにした。園田 (2003) は、進路が決まっている大学4年生は、今を一生懸命生きているというような現在指向が相対的に高いのに対して、進路が決まっていない大学4年生は、できることなら昔に戻りたいというような過去指向が相対的に高い傾向があることを示した。杉本 (2007) は、就職活動開始時期に活動を開始した者は時間的展望の希望が上昇し、進路未決定の混乱状態が低下することを示した。これらの研究は、就職活動中の経験が、過去・現在・未来の自分の中に統合されて、時間的展望が明確化していくことを示唆するものである。しかし、都筑 (1999) や園田 (2003) は就職活動開始前または就職活動終了後における横断調査であり、杉本 (2007) は、就職活動開始時期に該当する10月下旬から12月上旬の短期的な縦断調査であるため、就職活動開始から就職活動終了までのプロセスについては十分に明らかにはなっていない。

一方で、都筑 (2007) は、時間的展望には、単に未来について思い描くだけでなく、その実現に向けて実行・行動することも含まれていることを指摘し、縦断調査研究を用いて、認知(予想)と実行(行動)をセットにして分析していく必要性を述べた。このような視点を含めて、大学生の時間的展望と進路選択の関連を研究する際には、

就職活動開始時期の時間的展望と就職活動終了時期の行動の関連を検討する必要があるであろう。そこで、本研究では就職活動開始時期における大学生の時間的展望と内定獲得の関連について検討することを目的とする。

なお、一般に「内定」とは、学生が企業から「採用通知」を受け取り、学生が企業に「入社承諾書」を提出することにより、労働契約が成立した状態のことを指す。そのため、正式な内定日より前に「採用通知」の連絡を受けたことを「内々定」と呼ぶことがあるが、本研究では両者の区別をせず、「内定」という用語を用いることにする。

## 2 方法

### (1) 対象者

就職情報サイトのモニターである全国の大学3年生 2,971名(男性 915名;女性 2,056名)であった。

### (2) 調査時期

以下の2時点で調査を実施した。第1次調査(time1)は2016年12月中旬から2017年1月中旬であった。就職活動開始時期に該当する。第2次調査(time2)は2017年5月下旬であった。およそ内定獲得のピークの時期と重なる。

### (3) 用いた質問項目

#### ①時間的展望

time1の時点で尋ねた。白井(1997)の時間的指向性を用いた。これは、「あなたにとって過去・現在・未来のうち最も大切な時間はいつですか。その理由も書いて下さい。」と教示し、大切な時間を過去・現在・未来のうちから1つを選択させ、その理由を記述するよう求めるものである。時間的指向性は白井(1997)によって構成概念妥当性が確認されている。白井(1997)の分類方法に従い、選択された時間と記述の内容から「ポジティブな未来指向」「ポジティブな現在指向」「ネガティブな未来指向」「ネガティブな現在指向」「過去指向」の5タイプのうち1つのタイプに個人を

分類した。ここでの「ポジティブ」とは未来と現在の結合が示唆される場合を、「ネガティブ」とは未来と現在の結合が示唆されない場合を意味している。

白井(1997)による時間的指向性の記述例を以下に示す。「ポジティブな未来指向」は、大切な時間が未来であり、未来と現在の結合が示唆され、前向きで未来への自己関与がみられる場合である(記述例:「人は未来に向かって生きていくものだ」)。「ネガティブな未来指向」は、大切な時間が未来であり、未来と現在の結合が示唆されない場合である(記述例:「未来が充実していればそれでよいから」)。「ポジティブな現在指向」は、大切な時間が現在であり、現在と未来の結合が示唆される場合である(記述例:「今を頑張れば、過去も未来もよいものになるから」)。「ネガティブな現在指向」は、大切な時間が現在であり、現在と未来の結合が示唆されない場合、または、現在と未来の分離が示唆される場合である(記述例:「今のことしかわからないから」)。「過去指向」は、大切な時間が過去である場合である。

#### ②内定の有無

time2の時点で尋ねた。これまでに企業から内定を受けたことがあるか尋ね、「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。

### (4) 倫理的配慮

本研究の対象者であるモニターの会員規約には、回答を「大学や研究機関と実施する共同調査」に利用する旨を記載してある。なお、本研究は筆者らが所属している機関に設置された研究倫理委員会の承認を得た。

## 3 結果

### (1) 時間的指向性の度数分布

最も多いのは「ポジティブな現在指向」(50.7%)であった。最も少ないのは「過去指向」(4.5%)であった。およそ白井(1997)の分布と同様であった。

## (2) 時間的指向性と内定獲得の関連

時間的指向性と内定の有無のクロス集計を求め、 $\chi^2$ 検定を行った(表1)。その結果、人数の偏りは有意であった( $\chi^2[4]=16.10, p<.01$ )。「ポジティブな現在指向」は、内定ありの残差がプラスに有意であった。「ネガティブな現在指向」は、内定なしの残差がプラスに有意であった。

## 4 考察

本研究の目的は、就職活動開始時期における大学生の時間的展望と内定獲得の関連について検討することであった。本研究では、就職活動開始時期に「ポジティブな現在指向」である者は内定を獲得することにつながる事が明らかになった。また、就職活動開始時期に「ネガティブな現在指向」である者は未内定の状態につながることも明らかになった。

「ポジティブな現在指向」と「ポジティブな未来指向」は、現在と未来につながりがある点で類似している(白井, 1997)。そのような者は、過去と現在にもつながりがあることが近年の研究で示唆されている。

たとえば、石川(2014)は過去を過去として受容し、過去を現在や未来とつながるものとしてとらえている者は将来への希望が高く、将来目標

を持っていることを明らかにした。石井(2015)は、ポジティブな未来指向とポジティブな現在指向のように、時間的なつながりのある者は、ネガティブな未来指向やネガティブな現在指向のように時間的なつながりがない者と比べて、過去と現在の連続性も高いことを明らかにした。このように、過去、現在、未来のつながりがあるために、就職活動時に、自らが過去にやったことのPRや、入社後の将来ビジョン等を企業に説明が可能となり、内定獲得につながったのかもしれない。

一方で、本研究では、現在と未来につながりがある点で類似している「ポジティブな未来指向」と内定獲得の間には、「ポジティブな現在指向」と内定獲得の間のような結果はみられなかった。

白井(1997)は、「ポジティブな未来指向」が個人の発達と行動の動機づけに有効であるのは、個人が目標を立ててそれを実現したり、自立したりすることが重視されるような文脈においてであり、「ポジティブな現在指向」が個人の発達と行動の動機づけに有効であるのは、個人が自分の限界を受容したり他者との関係を生きたりすることが重視される文脈においてであることを指摘し、その理由として、前者が、未来を中心としてそこから現在を関係づける方略が必要になるためであり、後者が、現在を中心としながらそこから未来と関係づける方略が必要となるためと述べてい

表1 時間的指向性と内定の有無の関連

時間的指向性	内定あり	内定なし	合計	%
ポジティブな未来指向	40 (0.34)	32 (-0.34)	72	15.4%
ネガティブな未来指向	27 (0.89)	18 (-0.89)	45	9.6%
ポジティブな現在指向	141 (2.53)*	96 (-2.53)*	237	50.7%
ネガティブな現在指向	33 (-3.84)*	59 (3.84)*	92	19.7%
過去指向	10 (-0.58)	11 (0.58)	21	4.5%
	合計		467	

カッコ内の数値は調整された残差

\*  $p < .05$

る。

稲田・田澤 (2013) は、学生が就職活動開始時期の自らの志望とはかけ離れた就職先になっても満足度が変わらない理由には、志望先が変化すること、志望先が増加すること、会社の雰囲気と自分の性格を重ね合わせて自分にふさわしいと判断する進路を選択することなどが考えられることを示した。石黒 (2016) は、学生が希望通りではない進路決定をする際には、当初形成された理想将来像の揺らぎを経験し、就職が決まらないという危機的将来の回避を行うために「とりあえず」という形で将来の進路変更の可能性も含みこんだ仮設将来像を形成するというプロセスを経ることを明らかにした。このように就職活動開始時期は目標を立てることや自立することが多くの者に求められる。それはある意味で自明な文脈であるといえるのかもしれない。また、自分とは合わない企業があるなど、自分の限界を受容したり、企業で働く人との関係を生きようとしたりすることが重視される文脈であるといえるのかもしれない。そのために、就職活動開始時期に「ポジティブな現在指向」である者が内定を獲得することにつながったと思われる。

また、本研究の結果では、就職活動開始時期に「ネガティブな現在指向」である者が未内定の状態につながることも明らかになったが、「ネガティブな未来指向」である者の場合は、そのような結果はみられなかった。

時間的展望を修正させる介入 (Savickas, 1991) では三段階に分けて焦点を当てている。すなわち、第一段階はクライアントが未来指向になることであり、第二段階はポジティブな面もネガティブな面も含めて未来の自分について吟味させることであり、第三段階は現在の行動の結果、将来がどうなるかを考えさせたり、未来をコントロールできるという感覚を持たせたりすることである。「ネガティブな未来指向」の者は、第二段階に近かったと解釈すれば、不安と向き合う構えはできていたとも考えられるが、これはひとつの解釈に過ぎない。この点を明らかにするためには、

就職活動開始時と就職活動終了後の2時点比較ではなく、就職活動の最中を含めた3時点以上を比較する縦断的研究が必要であろう。今後の課題としたい。

## 引用文献

- 稲田 恵・田澤 実 (2013) . 希望進路の変化と内定先満足度—学生インタビュー調査— 梅崎 修・田澤 実 (編) 大学生の学びとキャリア—入学前から卒業後までの継続調査の分析— 法政大学出版局 pp.171-200.
- 石黒香苗 (2016) . 希望通りでない就職決定までの将来像変容プロセスの質的検討—文系大学生における就職活動に着目して— 青年心理学研究, 28, 1-15.
- 石井 僚 (2015) . 時間的連続性尺度の作成 青年心理学研究, 27, 39-47.
- 石川茜恵 (2014) . 青年期における過去のとらえ方タイプから見た目標意識の特徴—時間的展望における過去・現在・未来の関連— 発達心理学研究, 25, 142-150.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social: science Selected theoretical papers*. New York: Harper&Brothers. (猪股佐登留訳 (1979) . 社会科学における場の理論 (増補版) 誠信書房)
- Savickas, M.L. (1991). Improving career time perspective. In D. Brown & L. Brooks (Eds.), *Career counseling techniques*. Boston: Allyn & Bacon. pp.236-249.
- 白井利明 (1997) . 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 白井利明 (2018) . クルト・レヴィンにとって時間的展望とは何か—ダイナミック・システムズ・アプローチとしての生活空間論— 大阪教育大学紀要 (総合教育科学), 66, 75-94.
- 園田直子 (2003) . 大学生の進路決定と現在指向 久留米大学心理学研究, 2, 63-70.
- 杉本英晴 (2007) . 大学生の就職活動プロセスにおけるエントリー活動に関する縦断的検討—時間

- 的展望,就職イメージ,進路未決定,友人の就職活動状況に注目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 54, 81-92.
- 田澤 実・梅崎 修(2019). 就職活動時における過去の回顧と未来の展望 梅崎修・田澤実(編) 大学生の内定獲得—就活支援・家族・きょうだい・地元をめぐる— 法政大学出版局 pp.29-40.
- 富安浩樹(1997). 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 45, 329-336.
- 都筑 学(1999). 大学2-4年生の進路選択と時間的展望 教育学論集, 41, 119-137.
- 都筑 学(2007). 時間的展望の研究手法 都筑学・白井利明編 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版 pp.29-52.

---

# University students' Time Orientation and Getting a job offer

TAZAWA Minoru  
UMEZAKI Osamu

---

The purpose of this study was to investigate the relationship between university students' time orientation at the start of their job hunting and the acquisition of job offers. A total of 2,971 third-year university students who were monitors on a job search website, responded to the question of their time orientation at the start of their job search and whether they received a job offer. Similar to the procedures of previous studies, time

orientation was classified into five types: Positive Future Orientation, Positive Present Orientation, Negative Future Orientation, Negative Present Orientation, and Past Orientation. The results showed that the positive present-oriented job hunters were more likely to get job offers. It was also found that those who were negatively present-oriented at the beginning of their job search were not offered job offers.